

# チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 教育学部日本語教育学科機関報告 2012-2013 年度

近藤幸子（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学）  
canakkale.kondo@gmail.com

## 1. はじめに

日本語教育連絡会議では、過去に2回本学科の機関報告をしているが、今年度の会議がチャナッカレで開催されること、また本学科が20周年を迎えたことにちなみ、特に歴史的な流れを軸において、概要を報告したい。本学科は1993年に設立され、今年ちょうど20年を経過した。設立当初ゼロからスタートした時から関わっている1人の教師からみた学科の変遷ならびに、特にここ数年の学科の状況について報告したい。

## 2. 機関概要

Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi

Eğitim Fakültesi, Yabancı Diller Eğitimi Bölümü, Japon Dili Eğitimi Anabilim Dalı

İnönü Caddesi, Çanakkale 17100 TURKEY 電話・FAX : 90-286-213-1226

URL : <http://egitim.comu.edu.tr/bolum/yabancidil/japon/>

日本語教育学科長：アイドゥン・オズベッキ助教授（Assos.Prof.Dr.Aydin OZBEK）

1992年に創立された国立大学で、創立当初は教育学部と文理学部の二つの学部だけであったが、現在2つの研究大学院、10の学部、5つの単科大学、11の職業専門短期大学、音楽学校、および、17の研究所を擁する。大学全体の学生数は約40,000人である。本部および8つの学部はチャナッカレ市中心からやや西方の丘陵地帯にあり、ダーダネルス海峡を一望できる自然環境にある。日本語教育学科が属する教育学部は市内中心に位置し、経済・経営学部は隣接するビガ市にある。職業短期大学はチャナッカレ県の各市に、それぞれ地元の特色を反映した学科が設置されている。また大学本部からさらに離れた高い場所に天文台を有し、本部から5キロ西のケペズ市に医学部付属病院がある。

## 3. 教員および教員数の推移

日本語教育学科は大学創立の翌年1993年9月に開設された。開設時には日本人教員3人（1人は国際交流基金派遣専門家）でスタートしたが、毎年学年および学生数が増えるにしたがって教員数も増員され、全学年が揃った1997年9月からは日本人教員9人の体制となり、2010年まで続けられた。（※国際交流基金からの派遣は1997年で打ち切りとなり、現在全員が大学との契約教員である）

トルコにおける日本語教育の歴史が浅かったため、トルコ人教員が日本語教育に当たっていたのは長らくアンカラ大学だけであった。本学科では、1999年から学科の卒業生の中から優秀な者を研究助手として採用し、1年半の勤務の後、日本の大学院に留学させるという方法でトルコ人教員の育成に取り組んできた。2003年まで毎年1人ずつ合計6人が採用されたが、修士・博士号を取得した者が2008年4月から順次学科に戻って教壇に立つようになった。現在トルコ人教員は助教授4人、上級講師1人、研究助手1人となっている。それぞれの専門分野は日本語教育、言語習得、言語学、社会学、日本文学などである。

トルコ人教員が戻るに伴い、日本人教員の数は2人減員された。現在、トルコ人教員6人、日本人教員7人の体制で学科を運営している。トルコ人教員は主に上級学年に置かれている各自の専門分野の授業を担当し、日本人教員は主として初級から中上級レベルの日本語の各種授業を担当している。また、本学科は日本語教育学科であることから、4年次には教育実習もあるが、地元で日本語を導入している高校がないため、教育実習は本学科の予備教育課程の学生を対象に実施している。教育実習、日本語教授法、教育工学・教材開発は当学科の教員が担当しており、他の教育関連の専門科目については教育学部の教員が受け持っている。

なお、これまでに40人以上の日本人教員の入れ替わりがあったが、いずれの方々も日本語教育に情熱を持って教育に当たるとともに授業以外の活動にも積極的に関わってくださった。初期のころは修士課程を出ている人はほとんどいなかったが、本学科を退職後、修士課程に進学した人もかなりおり（ここ数年の傾向として修士課程を出ている人の割合が増えている）、一部の人を除き現在も日本や世界各国で日本語教育に携わっておられる。

このように設立から20年の間での大きな変化は、1993年から2010年までは日本人教員で学科を運営してきたが、それ以降は本学科出身のトルコ人教員が学科に戻り、学科運営の中心となったことである。

#### 4. 学生数（2012-2013）および入学定員の増加

2012-2013年学期の学生数：

予備教育課程…70人、1年生…30人、2年生…30人、3年生…17人、4年生…27人、計174人

予備教育課程というのは外国語教育学科の学生および外国語を重視する一部の他学科の学生に義務付けられているもので、学部学生になる前に1年間（最長2年間）選択した外国語のみを学習する。学年末にある能力試験（進級試験）に合格した者は学部1年生になれる制度である。

したがって、日本語教育学科のすべての1年生は所定の日本語試験に合格した既習者である。また、2年生終了時点で加算評定平均値が1.80以上なければ、3年生に進級できず、さらに3年生からは学期ごとに計算される加算評定平均値が1.80以上でなければ次学期の科目を履修できない制度になっている。なお、卒業時に必要な加算評定平均値は2.00である。

トルコは日本と違い若者の人口比率が高い国である。2012年の統計では人口75,627,384人でその平均年齢は30.1歳とのことである。近年、大学への進学率も高まり、2010年の統計によると高等教育（大学）の学生数は350万人である（通信大学学生数も含む）。トルコ高等教育機構（YÖK）や大学入試センター（ÖSYM）の情報によると、トルコでは私立62校、国立104校の計166校の大学が教育活動を行なっている。この中の多くは近年開校されており、イスタンブールでは最多の42校の大学と

5校の私立専門高等教育機関があるという。また、各県に1校は国立大学が設置されているが、私立大学のほとんどはイスタンブール、アンカラ、イズミールなどの大都市に集中している。

以上のような状況を反映して、本学科に入学する学生数や学生の資質も変化してきている。1993年の初年度の新生はわずか18名であった。翌年からはだいたい25人前後を推移したが、2006年ごろから定員が増加され35人規模になり、さらに2011年には定員が40人に増加されている。新生の数は毎年定員を満たしており、その上、年度によっては外国人学生の追加入学者もある。

また、ここ数年前まで外国語教育学科を専攻する学生は英語教育に重点が置かれている高校を卒業した学生がほとんどであった。しかし、入試制度が変更されてどんな高校からでも大学の外国語学科を専攻できるようになった。そのため、外国語の素養がない学生も入学するようになり、予備教育課程を1年間で終了できない学生が急増している。予備教育課程のクラス数も2011-12年度からはじめて3クラス編成で行なわれるようになったが、語学に大切な毎日の積み重ねの重要性を理解できない学生も多く、出席不足で試験が受けられない学生の割合も高くなってきている。

なお、第1期卒業生が出た1998年から2013年までの卒業生の数は約400人である。

## 5. カリキュラム

日本語教育学科が開設されてから、これまで3回カリキュラムの変更が行なわれたが、2005年から次のようなカリキュラムで行なっている。

教育学の専門科目は全学科共通であり、学科外のトルコ人教員によって行われるものが多い。また、3、4年次の言語習得、言語学、教授法、文学、社会などの専門科目は主に学科のトルコ人教員が担当し、漢字を除いた初級・中上級の日本語関係の授業は日本人教員が担当している。予備教育課程は日本語のみ教えられるが、日本人教員が中心になり直接教授法で行なっている。

- 予備教育： 文法[10]、会話[6]、講読[4]、文字語彙[4] ※通年
- 1年前期：文法[2]、会話[4]、講読[6]、作文[2]、文字語彙[4]、日本文化概論[3]、トルコ語(作文)[2]、教育学入門[3]
- 1年後期：文法[2]、会話[4]、講読[6]、作文[2]、文字語彙[4]、日本史概論[3]、トルコ語(会話)[2]、教育心理学[3]
- 2年前期：文法[2]、会話[3]、上級講読[6]、上級作文[2]、文字語彙[4]、トルコ教育史[2]、パソコン[4]、教育原理と教授法[3]
- 2年後期：文法[2]、会話[3]、上級講読[6]、上級作文[2]、文字語彙[4]、調査研究方法[2]、パソコン[4]、教育工学・教材開発[4]
- 3年前期：日本文学[4]、ト日翻訳[3]、日ト対照文法[3]、言語学[3]、日本語教授法[4]、コミュニケーション能力[3]、第二外国語[2]、教室運営[2]
- 3年後期：日本文学[4]、ト日翻訳[3]、日本社会[3]、言語習得[3]、日本語教授法[4]、ボランティア活動[3]、第二外国語[2]、教育測定と評価[3]
- 4年前期：社会言語能力[3]、教科書分析[3]、トルコ現代史[2]、第二外国語[2]、学校体験[5]、相談指導[3]、選択科目Ⅰ(日ト翻訳/経済発展の社会変動)[3]、選択科目Ⅱ(日本社会/日本文学/日本語学/日本語教育)[4]
- 4年後期：社会言語能力[3]、研究方法[4]、トルコ現代史[2]、教育実習[8]、特殊教育[2]、

学校運営[2]、選択科目Ⅲ（日ト翻訳／文学原書講読）[3]  
※ [ ]内は週ごとのコマ数。1 コマは 45 分。

## 6. 留学の状況（2008-2013）

在校生が日本に留学する機会は日本の文部科学省奨学金による1年間の日本語・日本文化研修生プログラムと、交流協定大学推薦枠の同プログラムおよび国際学生支援機構奨学金による短期留学がある。学生たちの日本への留学意欲は初期のころに比べやや低下してきているように思われるが、それでも毎年2-3人が留学の機会を得ており、後輩達に刺激を与えている。さらに、1年間留学をした学生の中には卒業後も研究留学を希望する人も多い。

### （1）文部科学省 日本語・日本文化研修留学（大使館推薦）

2008-1人（東京外国語大学）、2009-1人（大阪大学）、2011-3人（筑波大学・千葉大学・奈良教育大学）、2012-2人（熊本大学・広島大学）、2013-2人（京都教育大学・神戸大学）

### （2）交流協定校への留学

2008 岡山大学(日研究生、研究留学)、上越教育大学(日研究生)、広島大学(日研究生)  
2009 岡山大学(研究留学)、上越教育大学(日研究生)  
2010 岡山大学(研究留学)、上越教育大学(JASSO)  
2011 岡山大学(日研究生)、上越教育大学(日研究生)、愛媛大学(JASSO 3ヶ月/2人)  
2012 岡山大学(研究留学)、愛媛大学(JASSO 3ヶ月/2人)  
2013 岡山大学(日研究生)、上越教育大学(日研究生)、愛媛大学(JASSO 5ヶ月/3人)

### （3）文部科学省 研究留学（大使館推薦）

2010-1人（岡山大学）、2011-3人（京都大学・大阪大学・上智大学）、2012-1人（広島大学）、2013-2人（南山大学）\*予定

これまでに本学科出身で文部科学省研究留学生として修士・博士課程に留学して博士号を取得した者6人（うち4人は本学科教員）、博士課程を満期退学した者4人、修士課程修了者が4人いる。また、現在博士課程4人、修士課程4人、研究生2人が留学している。トルコには現在日本語関連の専攻学科がある大学はアンカラ大学、エルジェス大学、そしてチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学の3校だけである。しかし、このほかに日本語学科を設置している大学は4機関あり（規定の教員数を満たしていないため学生が募集できない状況）、他にも選択科目として日本語を取り入れている国立大学や私立大学が増加している。これらのことから、現在留学中の本学科卒業生が近い将来トルコ各地の大学で日本語教育に携わり、トルコの日本語教育および日本研究の発展、ひいてはトルコと日本の交流の深化に寄与してくれることが期待される。

## 7. 交流協定大学

協定大学名	締結年	主な交流	協定更新
東京海洋大学	2002年	2004年に1人1年間留学生を派遣したが、現在は水産学部が交流を続けている。	
愛媛大学	2004年	初期には1年間の留学生交換中心だったが、現在は短期（3ヶ月～5ヶ月）留学が主となっている。また、2012年度から愛媛大学学生の教育実習を受け入れている。これまでに愛媛大学教授による講演会も4回開催している。	2009年
上越教育大学	2005年	1年間の留学生の派遣が中心。上越教育大学からは教授による集中講義と講演を随時開催している。	2010年
岡山大学	2006年	1年間の留学生の派遣が中心。学部学生だけでなく、卒業生も大学院に派遣している。本学への短期留学生、実習生の受け入れ。	2011年
広島大学	2007年	1年間の留学生の派遣が中心。研究留学生の派遣。	2012年
関西大学	2012年	教員交流、研究交流中心	
大阪府立大学	2012年	教員交流、研究交流中心	

※現在、金沢大学との交流協定の手続きを行なっている。

## 8. その他

**本学科に関する特記事項です。**

### (1) 日本財団「日本語教育基金」(NF-JLEP)

本学科は1996年に「日本語教育基金」の設置機関となり、教育基金の運用利益は成績優秀学生への奨学金、短期日本研修プログラム（2008年から実施、毎年5-6人参加）、図書購入、ニュースレター『チャナッカレ日本語教育通信』の発行、その他に利用されている。

### (2) 日本語・日本研究関連の蔵書数

日本語・日本研究関連の図書は国際交流基金の教材助成、日本の企業からの寄贈、そして日本語教育基金による購入などで必要な図書を増やしてきたが、2008年に鳴門教育大学元教授の小野米一先生から7000冊の貴重な専門図書を寄贈していただき、現在10000冊以上の蔵書となっている。

### (3) 松下幸之助記念財団の助成による日本語・日本文化研修プログラムの実施

1997年8月に第1回目の助成を受けて実施してから同財団の理解ある支援によって、2013年8月の第15回まで毎年「日本語・日本文化研修プログラム」を実施してきた。毎年6人の学生が参加し、

これまでに約80人の学生が本プログラムに参加している。短期間ではあるが、日本を知る貴重な機会となっている。

#### **(4) トルコ・日本学生友好クラブ**

大学公認のクラブの一つで、毎年春に開催される大学祭や日本デーに学生や教職員一般人を対象に様々な日本の文化を紹介している。茶道、折り紙、演劇、日本映画上映、踊りなどであるが、最近では日本での留学時代に日本文化や武道を学んできたトルコ人教員によって、剣道、書道、生け花、将棋なども加わった。学科の学生たちはそれぞれ関心のあるグループに参加し、積極的に活動を行っている。

### **9. 卒業後の進路・就職先**

第1期生が卒業した1998年～2000年当時は、日系企業の数も少なく、卒業生の多くは観光関連の企業に就職することが多かった。しかし、2001年ごろからトルコに進出する日本の企業が徐々に増え、日系企業に就職する卒業生の数も多くなってきた。主な就職先はトヨタ自動車およびトヨタ系企業、デンソー・アイシンなどの自動車関連企業、住友商事・三井物産・伊藤忠商事・日商岩井などの商社、さらに、日立、キッコーマン、損保ジャパン、そして、ボスポラス海峡海底トンネル工事に携わる大成建設などの企業のほかに、JETRO、在イスタンブール日本総領事館、土日基金文化センター日本語講座がある。また、近年トルコ航空が日本人乗務員の代わりに日本語ができるトルコ人を客室乗務員として採用しているため、多くの卒業生の職場となっている。さらに、卒業生が支店長となっている日本の旅行会社H I Sやトルコ大手旅行会社DRAGなどの観光関連企業でも多くの卒業生が働いている。ただ、本学科を卒業すれば日本語教師の資格が取得できるので、高校で日本語の教師をすることを希望する者が多いが、現時点では日本語を導入している高校が少ないため、実現できていないのが残念である。

2013年度時点でトルコ進出を予定している日本企業も相当数あるので、今後も卒業生の就職先は確保できるのではないかとと思われる。

### **10. 終わりに**

以上、本学科の開設以来20年間の推移を概観してきたが、開設当初から現在まで本学科で働いてきた一人の教師として感慨深いものがある。これまで多くの日本人同僚と喜怒哀楽を共にしながら日本語教育に取り組んできた。現在は元教え子のトルコ人教員とも同僚となり、20年という歴史を感じている。今後は大学院を開設し、トルコにおける日本語・日本語教育・日本研究のさらなる発展と深化に、そしてトルコ・日本の友好交流に貢献していけるのではないかと期待している。